はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.11　al museo

三千人塚の大板碑

市内矢崎町２丁目にある三千人塚(都指定旧跡)の上には、今も阿弥陀三尊(あみださんぞん)を刻んだ大きな板碑(いたび)が立っています。康元元年（1256）の紀年銘があり、多摩地方では最古の板碑です。美好町３丁目の八雲神社脇に立っているものとともに、中世の板碑が立つ風景を偲ぶことができる数少ない遺跡の一つです。郷土の森では、三千人塚の板碑の複製を作製して活用する予定になっています。

中世の供養塔—板碑

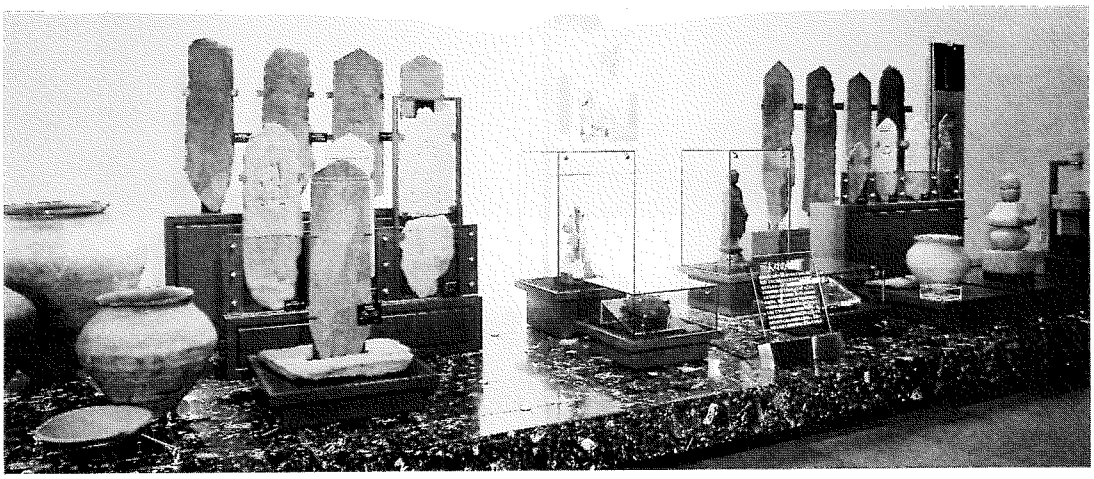
板碑とは、鎌倉時代から室町時代にかけて盛んにつくられた供養塔の一種です。埼玉県を中心に関東地方に多く分布し、別名、板石塔婆、青石塔婆ともいいます。府中市内には現在330基以上の板碑が、神社、寺院、郷土の森などに残されています。

これら板碑の建てられた目的は、死者の冥福を祈る追善供養や死後の安穏を願う逆修供養のため、あるいは作物の豊作など現実的な願いをもって営む場合もあります。

板碑の“顔”ともいうべき本尊をみてみましょう。板碑の多くは、梵字によって礼拝の対象である本尊を表しています。普通は、中央に大きな梵字を１つ刻んでいますが、さらにこの下に２つの脇侍を組合す場合もあります。こうした梵字で表現された本尊の多くは「キリーク」を刻んだもの、すなわち阿弥陀如来を表現しています。したがって、板碑造営の背景には、阿弥陀信仰の浸透を読みとることができます。しかし、なかには〔応永16年の法華経板碑〕のように「南無妙法蓮華経」と日蓮宗の題目を刻んだものもあり、日蓮宗徒の存在もうかがわせてくれます。

また、板碑には、年代や人名をはじめ造営の目的を記したものも多くあり、一つ一つの板碑が様々な背景のもとに建てられていたことを教えてくれます。例えば、もともと小柳町の正福寺にあった〔宝徳の結衆板碑〕には、「奉月待供養／結衆廿六人／逆修敬白／宝徳□□九月五日」と銘があります。この銘文から、この板碑は宝徳年間（1449—52）に26人からなる月待の講集団が各々の逆修を目的に営んだものであることがわかります。月待とは、特定の月齢の日に大勢で集まって飲食をしながら月の出を待つ民間行事であり、26人からなる集団はおそらく近在の村に住む人々と考えて良いでしょう。ようするに、本来仏教儀礼とはまったく別の集団が、板碑の造営を通じて仏教的作善を願っていたことが知られるのです。

中世といえども、府中あるいは武蔵国にかかわる文献史料は多くはありません。こうしたなかで板碑は最も身近にある史料といえます。一つの板碑から得られる情報は限られていますがこれが数十、数百集成されることによって、地域史を掘り起こし、人々の信仰生活の一端を知ることにつながるのです。（F）



自然調査入門講座 その2

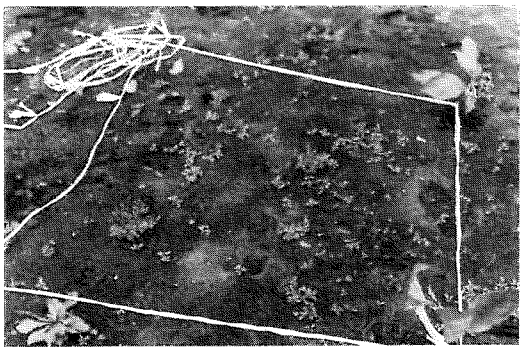
植物群落の調査 その1

今回より植物、昆虫、野鳥の順で、その具体的なフィールド調査方法の一端を紹介していきます。ここで扱う調査とは、ごく一般的に行われる方法を取り上げており、比較的簡易に実習が出来、専門家以外の人でも十分に対応可能なものです。従って植物調査の全てを紹介しているのではないことをおことわりしておきます。

＝植生と群落＝

植物は地球上のいたる所に生息しています。山、平野、川岸、田畑、都会と、地面がアスファルトやコンクリートで固められていない限り植物の生えていない場所はまずありません。各々の環境下には多くの種類の植物が生息しており、例えば一つの小山では300種を下らない程です。この時の300種類全部をこの場所の植物相と言い、その生えている状態を植生と呼びます。この植生を基盤にして、一連の生態サイクルが成り立っているわけです。

さて、一つの植生でも一様な集団で構成されているわけではありません。例えばこの小山にはスギ林もあればクヌギ林、ススキの草原、耕地の雑草集団もあり、他とは互いに区別出来るまとまりをもっています。これら植物の個体群を群落といい、今回お話しする調査方法は、この群落を対象としています。植物は決して雑然と生えているわけではありません。そこに根ざす根拠を見い出すことが群落調査の目的なのです。それでは一般的に用いる簡易方法の実例という点で、平地の雑草群落を扱う場合をお話しします。



＝標本抽出法＝

本来ならば群落内の全てを調べることが望ましいのですが、広範囲にわたってくまなく見て回ることは不可能に近いといえるでしょう。そこで通常は、群落よりある程度の面積(サンプル)を選び、その範囲を詳しく調査し、得られたデータより全体を推測する方法がとられています。これが標本抽出（サンプリング）測定法です。

これは正方形のワクを用いることで簡単に行われますが、ワクの大きさや群落内での配置、数などは、その群落の構造によって変わってきます。校庭や空地などで行う場合は１ｍ四方のワクを使います。背の低い、生え方の平均しているような群落では50cm四方のワクでも十分です。材料は、木製の細い板を２枚、端の部分を動くようにして止め、これを２枚組合せて正方形とするもの、１ｍの折れ尺４本を組合せたもの、あるいはひもを結びつけて正方形をつくるものと、様々な手段があります（写真はひもを使用した例)。ワクの配置は一定間隔、ランダム、主観的に場所を選ぶ、などがありますが、一定間隔による方法が一番手軽でしょう。広い群落でなければ10か所くらいでおよその結果が導き出せます。継続観察する場合は、１ｍ正方形ワクの各辺に10cmおきの目盛をつけ、針金か糸を格子状に張っておくと便利です。これを定置ワクと言い、観察対象によっては50cmないし25cmのワクでも間に合います。

さて、いよいよこの方形ワクよりデータを収集していくわけですが、その内容とまとめ方については次回でお話しします。（N）

防人歌と武蔵国の交通路

深澤　靖幸

1

近年、奈良平安時代の古道の発見、発掘調査が相次いでいます。

一昨年、昨年と全国的に注目された佐賀県吉野ケ里遺跡でも、8～10メートルの幅を持つ道路跡が姿をあらわしています。この道路跡は大宰府から肥前国府へ通じる西海道に比定され、この道路跡に隣接して検出された掘立柱建物群は駅家の可能性が指摘されています。

武蔵国では、本紙9号の「最近の発掘調査から」で紹介したように、府中市域から国分寺市域にかけて幅12メートルの道路跡がほぼ一直線に延びていることが確認されています。この道路跡は出土遺物から古代のものであることに間違いはありません。さらに、その規模や一直線に延びることから推して、当時の官道すなわち東山道の一部とみて誤りないでしょう。東山道は、都から近江、信濃、上野、下野をへて陸奥、出羽へと至る道です。府中、国分寺で確認された道路跡は、上野から南下して武蔵国府へ通じる道の一部と考えられるのです。

さらについ最近、所沢市の東の上遺跡でこれと同規模の道路跡が発掘調査によって発見されています。また、多摩市連光寺の本村遺跡群打越山遺跡でも道路跡の発掘調査が行われています。いずれも新聞報道がされたにすぎず、詳細はわかりませんが、東の上遺跡の道路跡は出土遺物から奈良時代のものとみて大きな誤りはなさそうです。その規模や位置関係から推して、府中、国分寺の道路跡の延長すなわち東山道である可能性が考えられます。一方、打越山遺跡では、遺物の出土がなく、いつの時代の道路なのかを判断できませんが、丘陵の尾根を切り通し状に掘削した大規模なものです。

2

さて、これまた本紙7号の「万葉集防人歌と堀辰雄」の中で紹介されているように、郷土の森園内には万葉の歌碑が設置されています。

赤駒を山野に放し捕りかにて
　多摩の横山徒歩ゆか遣らむ

右の一首は、豊島郡の上丁椋椅部荒虫が妻、宇遅部黒女

この歌は、『万葉集』巻20に収められた天平勝宝7年（755）の武蔵国防人歌12首の内の一首です（巻20-4417）。赤駒が山野に逃げてしまい捕らえることができず、防人として旅立つ夫に多摩の横山を歩いていかせなければならない辛さを妻が詠んだものです。

ここに登場する「多摩の横山」は、一般に今日の多摩丘陵をさしたといわれています。軍防令によれば、国内の各地から徴発された防人たちは、いったん国府に集合し、国司に伴われて難波津に向かい、さらにそこから専使に率いられて任地である大宰府に赴くことが規定されています。

3

ところで、武蔵国は、宝亀2年（771）に東山道から東海道に配置替えになったことが『続日本紀』の宝亀2年10月21日条によってわかります。

> 太政官奏。武蔵国雖属山道。兼承海道。公使繁多。祗供難堪。其東山駅路。従上野国新田駅。達下野国足利駅。此便道也。而枉従上野国邑楽郡。経五ケ駅。到武蔵国。事畢去日。又取同道。向下野国。今東海道者。従相模国夷参駅。達下総国。其間四駅。往還便近。而去此就彼損害極多。臣等商量。改東山道。属東海道。公私得所。人馬有息。奏可。

したがって、12首の防人歌が詠まれ大伴家持によって撰せられた、天平勝宝7年には、武蔵国は東山道に所属していたはずなのです。

防人の引率は公的なものですから官道を用い

るべきです。すなわち、武蔵国の防人の道程は国府から北へ向かう東山道であるはずです。ところが前記の「赤駒を・・・」の歌では豊島郡（今日の豊島・板橋・文京区の一帯）出身の防人が多摩丘陵を越えていく情景を詠んでいるのです。

さらに、武蔵国の防人歌の中には、

我が行きの息づくしかば足柄の
峰這ほ雲を見ととゆ思はね
右の一首、都筑郡の上丁服部於由　（巻20-4421）

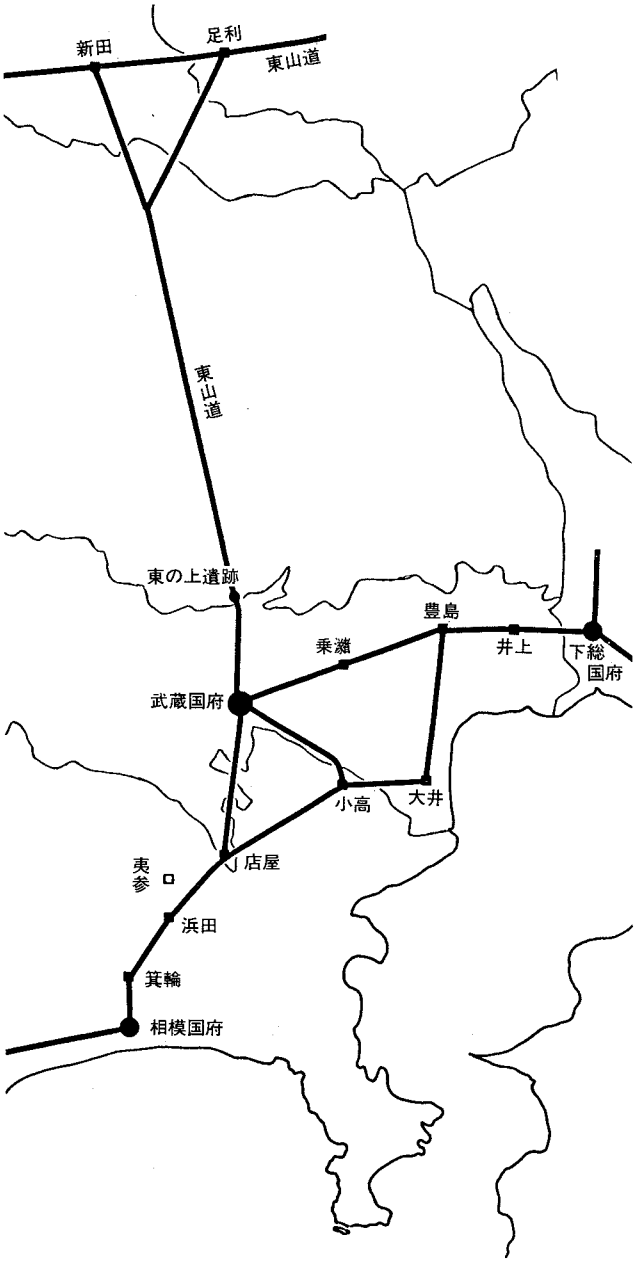
足柄の御坂に立して袖振らば
家なる妹はさやにも見もかも
右の一首、埼玉郡の上丁藤原部等母麻呂　（巻21-4423）

の２首があり、武蔵国の防人たちが、多摩の横山、そして足柄峠を越えて難波津に向かったことがわかります。

10世紀に完成した『延喜主計式』の記載によって、平安京までの行程をみてみましょう。武蔵国は往路29日、復路15日とあり、上野国は往路29日、復路14日とあります。武蔵国は東海道、上野国は東山道を通っていますから、武蔵国から東山道を通って上京すれば29日＋何日ということになります。つまり東海道の方が便が良かったわけです。

武蔵国が何故当初東山道に配置されていたのかはわかりません。武蔵国内あるいは周辺諸国との政治的状況によるものでしょうか。または、丘陵を横断する交通路がまだ整備されていなかったのかも知れません。しかし、防人歌が詠まれた天平勝宝７年の頃には、こうした問題も解消されて、便の良い東海道がもっぱら使われていたと推定できます。防人引率のような公的な旅に用いられていたのですから、未公認ではあるものの官道的性格を既に持っていたとも考えられます。こうした既成事実があって、宝亀２年に配置替えされたのではないでしょうか。

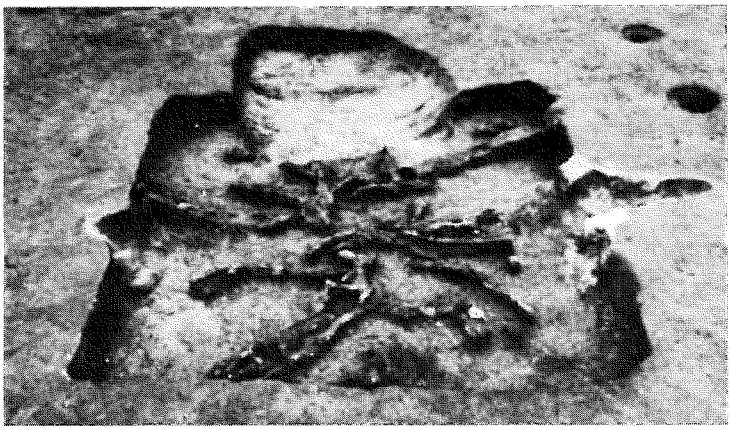
多摩丘陵は、ニュータウンの建設によってこの10年あまりで大きく姿を変え、現状から古道を探る事は困難になってしまいました。しかし、丹念な実地踏査と発掘調査の積み重ねによって国府へつながる道が確認されるかも知れません。



武蔵国府を中心とした古代の交通路

═最近の発掘調査から═

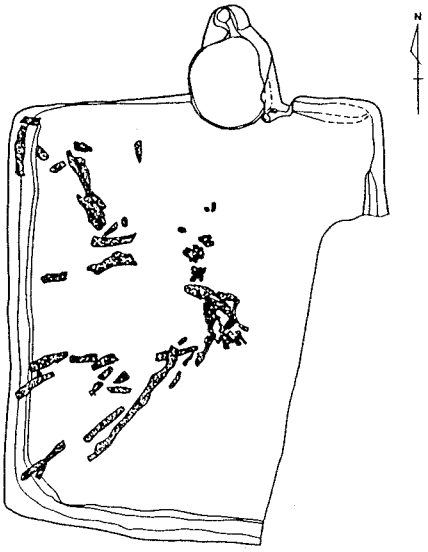
今回は、美好町１丁目で見つかった、火災にあった竪穴住居跡についてお話します。この住居跡が見つかった調査地区は、甲州街道の「寿町交差点」の西約200ｍのところです。調査地区の面積は約600㎡足らずですが、11軒の竪穴住居跡、６棟の掘立柱建物跡など多くの遺構が見つかっています。火災にあった住居跡はこのうちの１軒でした。



火災にあった住居跡（南から）

この住居跡は、調査地区の真ん中で２軒の住居跡と重なって見つかっています。この３件のなかでは１番最後に作られたもので、出土した土器から平安時代の中頃のものであることがわかりました。火災にあった住居跡は、竪穴の部分で一辺が約４ｍ、深さが約40㎝あり、竈（かまど）が東の壁に作られています。床には、柱を立てたと考えられる穴は見つかりませんでした。

さて、この住居跡がなぜ火事にあったことがわかるのかといいますと、それは、ほかの住居跡には見られないほど多量の炭化した木材が見つかったからです（写真参照）。また、掘っている最中から焼けた土や炭と一緒に壊れていない土器がいくつも見つかりました。これは火事になった時、逃げるのがやっとで土器などの生活用品を持ち出す時間が無かったためでしょう。



（ことぶきマンション地区）1/80

このように火災にあった住居跡は府中市内でもこれまでにいくつか見つかっていますが、炭化した木材はあまり残っていません（図参照）。今回調査したものは、今までの中で比較的炭化した木材の残りが良く、おぼろげながらも上屋（うわや）の構造がつかめるものでした。それぞれの壁より中央へ２本の平行する垂木（たるき）があり、それに掛けるように対角線上にも垂木が見られます。竪穴の周りにはピットが見つかっていないことから、これらの垂木がどのように固定されていたのか、そして垂木を支える柱が床面に直接立てられていたのかどうかはわかりません。残っていた木材の太さは大体10㎝前後と推定でき、ほかの木材は細かったため残らなかったのでしょう。

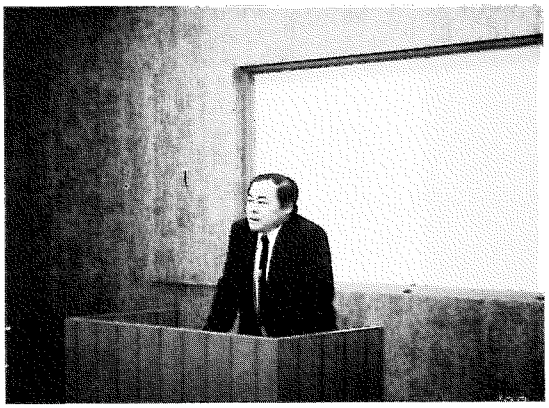
今回の調査では竪穴住居の上屋構造の全容を知ることはできませんでしたが、こうした火災住居跡の調査を積み重ねていけば、将来その構造が総合的に復元されることでしょう。

（府中公共職業安定所地区の調査から　塚原）

カメラアングル

ワラ細工講座

3月11日から**氷河期の狩人―武蔵野台地の旧石器**と題して特別展を開催。市内の武蔵台遺跡の出土品を中心に、石器やオオツノシカの化石などがズラリ。1万年以上も昔の人々のくらしと自然環境を紹介しています。18日の記念講演会では、小林達雄先生に「日本の旧石器時代」を語っていただきました。



特別展記念講演会

1月20日には自家製のワラを使った**ワラ細工講座**を実施。園内復原農家に集った子供たちは巧みに編まれていくワラ草履に目を白黒させながら挑戦しました。また2～3月には5回にわたって**陶芸教室**を行いました。今年も市内から出土する緑釉陶器の再現にチャレンジ。思い思いの形をした作品がずらりと焼き上がりました。

恒例となった**梅まつり**は今年で3回目。特別展示室では企画展**梅と健康食品**を開催(2/4～3/4)。昨今の健康食ブームに乗じて好評でした。**梅講座**では、健康食品(2/18)、古典文学(2/25)の2つの話題をお届けしました。

梅講座―梅と健康食品

陶芸教室

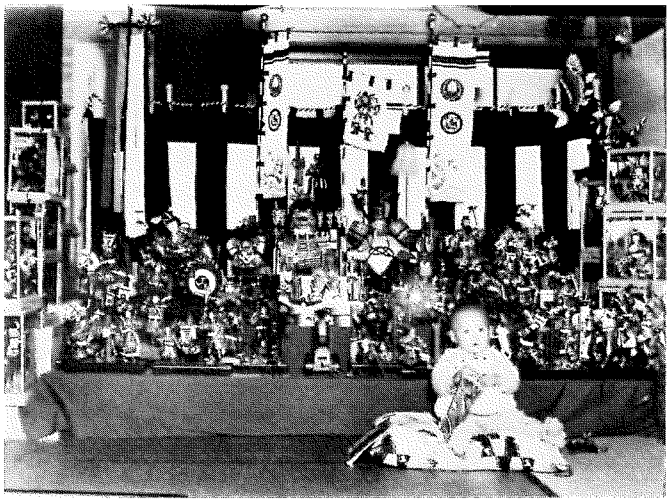
あれこれ

3月と5月の節句

1936年（昭和11年）5月5日の端午の節句。豪華絢爛たる武者人形の前の子どもは、意気軒昂たる表情で未来を見つめています。この年2月に、2・26事件。10月には多摩地方随一という府中尋常高等小学校の校舎が落成。翌年には日中戦争開始。明暗目まぐるしく変わるなかで、この子どもも激動の時代を生きていくことになりました。

さて、節句（節供）というのは、一年間のうちの特別な日で、仕事を休み神様に食べ物を供え、人々も一緒に食べたり、またお祓いをしたりする日でした。節句は年に5回あり、五節句といい、人日（正月7日）上巳（3月3日）端午（5月5日）七夕（7月7日）重陽（9月9日）のことです。いずれも中国の伝統を古代日本の貴族たちが受け入れたのが始まりでした。

端午の節句は、薬草を摘んだり、蓬で人形を作ったり、菖蒲酒を飲んだりして、けがれを追い払う日でした。上巳の節句も、人のけがれを人形に乗せて川に流してしまう「流し雛」というお祓いの行事をした日でした。ところが、この二つの節句は、いつしか、一方が鯉幟を立て武者人形を飾り、粽や柏餅を食べる男の子の節句に、一方が雛人形に菱餅や桃の花を供え、白酒で祝う女の子の節句へと分かれていったのです。



戦後の1948年、この2つの節句の一方だけをとり、「こどもの日」が定められました。しかし、3月の女の子の節句と5月の男の子の節句は、今も生き続け、飾りの豪華さも衰えを感じません。（O）

インフォメーション

特別展　ミクロの世界　7月22日～9月2日

この夏休み、郷土の森でミクロ体験！

〝私達を含めた生物は、一体何から出来ているのでしょう〟。この疑問を解いたのはイギリスのロバートフックという人で、生物は細胞が集まって成り立つことが明らかになりました。この細胞発見から急速に生物学は発達していったのです。それには、ここで重要な役割を演じた顕微鏡の活躍があればこそでした。顕微鏡の発明、発展は生物学の歴史に様々な業績を残していったのです。

本展示会では、古い時代の顕微鏡から現在の顕微鏡までをいくつか紹介するとともに、普段見る機会の少ない自然界の微小な世界を実際に皆さんでのぞいてもらい、自然への視野をさらに広げていただけたらと考えています。

あるむぜお　第11号
al museo　イタリア語
〝博物館で〟〝博物館にて〟の意
発行年月日　平成2年3月31日
発　行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423—68—7921